新出の『医心方』古写零本巻二十七

――現存した国宝仁和寺本の僚本――

小曽戸　洋

日本医史学雑誌第三十一巻四号
昭和六十年十月三十日発行　昭和六十年三月二十日受付

一

周知のとおり昨年十一月に撰進一千年を迎えたわが国現存最古の医書『医心方』は、これまで本学会の杉立義一氏や私共の研究によって、その書誌学的様相がかなりの点まで判明してきた。

現存する『医心方』のテキストとして最も重要なものは、いうまでもなく昨年国宝に指定された半井本と、そしてすでに早くから国宝指定を受けている京都仁和寺所蔵の残欠本、この二系統である。仁和寺所蔵のものは、今日、全三〇巻中、わずかに五巻、すなわち六分の一しか伝わらないが、その僚本、いわゆる片割れの一部が（財）前田育徳会尊経閣文庫に現伝していることが、このたび私共研究室の調査研究によって明らかとなった。一巻に満たない零本ではあるが、国宝の僚本が別所に現存するということ自体、極めて重視すべき新事実である。よって以下、尊経閣文庫に所蔵されるこの仁和寺本『医心方』の僚本について報告する。(1)

二

尊経閣文庫には鎌倉時代以前の旧鈔にかかる古医書がいく種類もあるが、このうちに「延寿要集」と称される粘葉装の

古鈔本二冊がある。二冊ともに巻首・巻尾が欠損しており、したがって書名はその本自体のどこにも残っていない。「延寿要集」という書名は、この二冊の本の包紙に書かれているもので、もとより原書名ではなく、前田家に入ってから分類整理の都合上、仮に与えられたものであろう。いま便宜上、この二冊のうち、朱のヲコト点を存するものを「延寿要集」A本、そうでないものを「延寿要集」B本と称することにする。

「延寿要集」A本は、全部で四〇葉と残紙半行分が現存している。原本はかなり損傷が激しく、修理するに中打をもってしてある。字体も紙質もかなり古いもので、朱のヲコト点が全葉にわたって付されるところからみても、少なくとも鎌倉時代以前の旧鈔にかかるものと推定される。

巻首が欠損しているので、最初の篇題も欠けているが、書中に「谷神第二」「養形第三」「用気第四」「導引第五」という篇題が見えている。これはまさに『医心方』巻二十七の養生部の諸篇題と符合する。そこで半井本『医心方』とこれを照合したところ、内容の文章もことごとく相類[2]することが判った。

図1右に開巻首の写真を示したが、これを半井本と比較すれば、巻首が何葉分欠損しているか考定できるはずである。すなわち半井本は巻子本であるが、それに対し尊経閣文庫本は粘葉装であるから、入るべき行数はおのずから決まっている。こうして復元すると、ちょうど巻首一葉が欠脱していることが知れた。正確にいえば、第一葉の裏の最終行の後半が残存しており、この表側の上半部分には「医心方巻廿七」という文字があったはずで、下半の「金丹未能延寿故老子曰」の表に文字が書かれた痕跡がないのは頷ける。

以上によって「延寿要集」A本が『医心方』巻二十七の残本であることが確認された。ではこのテキストはいったい何物であろうか。

図１「延寿要集」Ａ本（『医心方』巻二十七の巻首（右）と巻尾（左）

三

ヲコト朱点をもつ鎌倉時代粘葉装の『医心方』といえば、当然想起されるのが仁和寺本である。ここに仁和寺本の伝承について詳細を述べるのは控えるが、[3][4] 寛政三年（一七九一）多紀元徳が幕命をもって仁和寺本を江戸に郵致し、転写した際には全三〇巻中、一六巻にわたる部分が存在していた。しかし今日仁和寺には五巻分しか現存していない。多紀家は臨模本を二部作製し、幕府紅葉山文庫への献納本と自家蔵本に充てたが、そのうち前者が今日伝わる内閣文庫本である。これら仁和寺現存本ならびに内閣文庫影写本と、この尊経閣文庫本とを比較すると、果たしてその体式は実によく符合するのである。すなわち毎半葉の行数七行、一行の字詰、[5] そしてヲコト点の遣い方、みな同じである。さらに紙質といい、虫損の様相といい、仁和寺本と酷似する。[6] あるいは界高、界隔もまた同寸である。もはやどの点から見ても、「延寿要集」Ａ本が仁和寺本『医心方』の僚本であることは疑いないと考えられる。

さて、多紀元徳が臨模せしめた内閣文庫本には巻二十七に

相当する部分がある。それは同巻の後半に該当するものであるが、元徳が仁和寺のこの残簡を見た時点ではむろん半井の完本は世に出ていなかった。したがって元徳らは、この部分が『医心方』の第何巻に所属する残簡であるかを決定することができず、巻数未詳として扱うしかなかった。それはともかく、これは巻二十七の後半である。

尊経閣文庫の古鈔本は巻二十七の前半、そして内閣文庫の臨模本は同巻の後半、詳しくいえば、前者は巻二十七の導引第五の半ばまで、後者は行止第六の直前、すなわち導引第五の終り三行分以下が残っているのである。その間の字数を半井本によって算出すると、ちょうど二葉分が尊経閣文庫本と、内閣文庫本との間に欠けていることが判る。

ここで強調しておきたいのは、第一に、内閣文庫本つまり多紀氏臨模本には巻二十七の前半は写しとられていないということ。第二に、多紀氏臨模本の原本である巻二十七の後半は現在仁和寺から失われてしまっているということである。その伝承経緯略図を図2に示したが、要するに、寛政三年、多紀氏の見た時点では仁和寺本巻二十七の前半はすでに仁和寺より流出していた。そして尊経閣文庫本は少なくとも前田綱紀没前に前田家に入っていたと考えられることから[7]、享保九年（一七二四）以前に巻二十七の前半と後半は割裂して、一方は前田家に流出、一方は仁和寺に残存。仁和寺に残っていた後半は少なくとも寛政三年まではあったが、その後、佚してしまい、現在仁和寺にはわずかに五巻分しか伝わらなかった、という経緯なのである。

今回確認された尊経閣文庫所蔵の旧仁和寺本は、内閣文庫本にも写しとられていない、つまりその複写すらどこにも存在しない資料という点で、大きな価値をもつものである。現存する仁和寺本は従来五巻とされてきたが、これによりさらに一巻を追加することとなった。

尊経閣文庫所蔵の貴重書中には「仁和寺心蓮院」の旧蔵印を有するものがいくつもある。たとえば国の重要文化財指定の『山密往来・吾妻鏡』、『仁和寺心蓮院文書』[8]をはじめ、医学関係資料では丹波家の記録『丹家記』が挙げられる。これは仁和寺の旧蔵本がかなりの程度まとまって尊経閣文庫に流入したこと[9]を証明する物的証拠であり、尊経閣文庫本「延寿

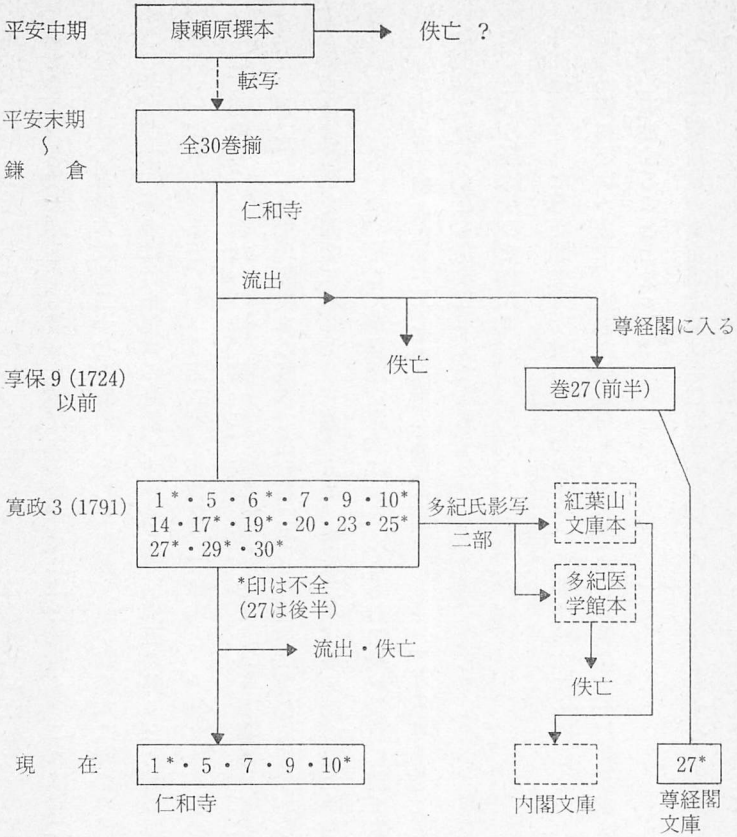

図 2　仁和寺本『医心方』の伝承経緯

要集」A本が仁和寺から出た『医心方』であることを裏づける傍証の一つとなろう。

尊経閣文庫は江戸時代はもとより、明治・大正を通じて厳重に管理されてきた。それが一般の学者に開かれたのは、昭和初年に財団法人化され本郷から現在地駒場に移転してより後のことである。江戸幕府の威勢をかった多紀医学館ですら、前田尊経閣の秘籍の数々を目にすることはできなかった。もし多紀医学館の人々の目に触れていたなら、当然このことは気付かれ、『医心方』校刻の資料として用いられていたはずである。医学館の人々が夢想だにしなかった古医学資料が他にも尊経閣文庫に伝えられている。

四

なおついでながら「延寿要集」B本についても若干触れておこう。この書もまた首尾が欠損しており、原書名は未詳である。篇題は次のとおり。

（巻首篇名欠）　　嗇神第二
養形第三　　臥起第四
眼目第五　　頭髪第六
歯牙第七　　爪甲第八
沐浴第九　　導引第十
愛気第十一　　言語第十二
居処第十三　　服用第十四
厨膳第十五　　（篇名欠）
日食禁第十七　　補益第十八
損害食第十九　　合食禁第二十
（篇名欠）　　酒禁第二十二
菓禁第二十三　　（篇名欠）
禽獣禁第二十五　　（以下未詳）

すなわち『医心方』巻二十七・巻二十九によく似た内容をもつ極めて古い時代の医書である。しかし明らかに『医心方』ではなく、現存する資料のうちでは、丹波行長の『衛生秘要抄』に最も類似する。ただ『太素』『小品方』ほかの『医心

方』や『衛生秘要抄』に含まれない佚文[10]も見られる。したがって本書の書名は今のところ同定することができないでおり[11]、今後の研究に期待したいが、ともかく「延寿要集」B本もまたかけがえのない貴重な資料である。

五

仁和寺の国宝『黄帝内経太素』『黄帝内経明堂』の奥書が示すように、仁和寺は丹波家とゆかりのある寺院である。丹波家旧蔵の古医書は何らかの理由で仁和寺に入り、そのいくつかは後に前田尊経閣に流出した。ここで報告した『医心方』の零本をはじめ、現在前田育徳会尊経閣文庫に所蔵される『黄帝内経太素』『黄帝内経明堂』『座右抄』『吉日抄』『衛生秘要抄』『丹家記』や書名未詳の医書の断簡などは、みなそういった経緯で伝えられたのではないかと推測される。これらのうちには『小品方』の古巻子本をはじめ、これまで世に知られていなかった天壌間無二の国宝級の資料がある。

文献および注

(1) 本稿は昭和六十年一月の日本医史学会例会における講演発表の概要をまとめたものである。文献の教示を仰いだ前田育徳会尊経閣文庫の太田晶二郎先生、ならびに東北大学文学部中国哲学研究室の石田秀実先生、富山大学助教授の磯部彰先生に、ここに紙面を借りて謝意を表する。

(2) むろん半井本と仁和寺本というテキストの違いから、細部においては字句の異同がある。そこに異本のもつ意義があることはいうまでもない。

(3) 小曽戸洋「漢方古典文献概説（九）医心方」、『現代東洋医学』、第五巻四号（一九八四）。

(4) 矢数道明・小曽戸洋「江戸医学における『医心方』の影写と校刻事業」、『漢方の臨床』、第三二巻二号（一九八五）。

(5) 不同ではあるが、平均一七字程度。

(6) 尊経閣文庫本と仁和寺本の原書を直接比較することは不可能であるから、後者についてはかつて筆者が仁和寺においてこれを検したときの記憶による。

(7) 尊経閣文庫の来歴については次の文献を参照。① 太田晶二郎、「前田育徳会・尊経閣文庫」、前田育徳会尊経閣文庫小刊一ノ二

（一九七四初版・一九七六修補）。② 太田晶二郎、「前田育徳会尊経閣文庫あれこれ」、前田育徳会尊経閣文庫小刊三（一九七七）。③ 太田晶二郎、「尊経閣文庫問答」、前田育徳会尊経閣文庫小刊一〇（一九八〇）。

（8） 太田晶二郎、「巻子本吾妻鏡解題」、前田育徳会尊経閣文庫小刊一二（一九八二）。

（9） 前田利常の時代、仁和寺所蔵の貴重書を精力的に借覧し鈔写したという。藤岡作太郎、『松雲公小伝』（一九〇九）

（10） たとえば、養形第三には『太素』巻一からの引用とみられる佚文が、また厨膳第十五には『小品方』巻十一からの引用とみられる佚文がある。

（11） ［補注］後日、金沢文庫に現蔵される医書の断簡（目録部分）とこの「延寿要集」B本の篇題がきわめて酷似することに気付いた（関靖『金沢文庫の研究』、芸林社、一九七六、三一三～三一二頁）。その図版は、石原明「梶原性全の生涯とその著書（二）」（『日本医史学雑誌』、第六巻四号、一九五六）に載せられており、関・石原両氏ともこれを『頓医抄』の目録と断定しているが、その異同からみて筆者は両氏の見解には賛同しかねる。「延寿要集」B本とこの金沢文庫の断簡はおそらく密接な関係にあるであろう。この断簡によって、「延寿要集」B本の欠落した篇名は次のごとくほぼ確実に知ることができる。大躰第一、月養第十六、飲禁第二十一、薬禁第二十四（?）、魚虫禁第二十六。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究室）

A Newly Found Old Manuscript of the "ISHINHO"

by Hiroshi KOSOTO

The "Ishinho" is the oldest extant medical work in Japan. It was written by Yasuyori Tanba in 984. There exist numbers of MSS known today, each of which can be traced back either to the "Nakarai" Codex or to the "Ninnaji" Codex. Both of these have been designated as national treasures. As for the latter, only 5 volumes of the original 30 have been preserved in the Ninnaji temple in Kyoto, the

other 25 volumes having been lost. The author recently discovered one of these 25 volumes in the Sonkeikaku library of the Maeda Ikutokukai Foundation. This newly found MS would contribute largely to the study of medical history in medieval Japan.